

病害虫発生予察情報(7月予報)

令和5年6月28日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (7月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	葉いもち・穂いもち	発生量：少 (発病株率 2.3%)	6月上～下旬の葉いもち発生量：少(発生なし)(-) 6月上～下旬の置き苗いもち発生：なし(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：ほぼ平年並(±)
	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	発生量：やや少 (発病株率 0.18%)	6月上～中旬の縞葉枯病発生量：少(発生なし)(-) 6月上～中旬のヒメトビウンカ発生量：少(-) 6月の予察灯誘殺数：少～多(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ平年並(±)
	セジロウンカ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.8 頭/株)	6月上～中旬発生量：少(発生なし)(-) 6月の予察灯誘殺数：少～多(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ平年並(±)
	トビイロウンカ	発生量：やや多 (寄生虫数 0.002 頭/株)	6月上～中旬発生量：並(発生なし)(±) 6月の予察灯誘殺数：少(誘殺なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ平年並(±)
	斑点米カメムシ類	発生量：並 (平年捕獲数 19.4 頭/30 回 すくいとり)	6月上～中旬発生量：少(-) 6月の予察灯誘殺数：少(-) (ただし、島田市：アカヒゲ多(+)) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ平年並(±)
かんしょ	ナカジロシタバ	発生量：やや多 (寄生虫数 0.3 頭/m ²)	6月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ平年並(±)
	イモキバガ	発生量：多 (巻葉数 2.2 葉/m ²)	6月中旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ平年並(±)
	エビガラスズメ	発生量：並 (寄生虫数 0.04 頭/m ²)	6月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ平年並(±)
温州みかん	黒点病	発生量：並 (発病度 0.18)	6月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：ほぼ平年並(±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：やや少 (寄生果率 0.2%)	6月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：ほぼ平年並(±)
	ミカンハダニ	発生量：少 (寄生葉率 8.8%)	6月中旬発生量：やや少(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：ほぼ平年並(±)

作物名	病害虫名	予報 (7月の県平均平年値)	予報の根拠
中晩柑	かいよう病	発生量：並 (発病度(果) 0.19)	6月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
キウイ フルーツ	かいよう病	発生量：多	6月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (-) 降水量：ほぼ平年並 (±)
果樹全般	カメムシ類	発生量：やや少	越冬量：並 (±) かんきつ花飛来量：少 (-) 6月の成虫誘殺数：少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
茶	炭疽病	発生量：多 (病葉数 15.3 葉/1.25 m ²)	6月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	もち病	発生量：やや多 (病葉数 13.2 葉/1.25 m ²)	6月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (-) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	輪斑病	発生量：多 (病葉数 19.0 葉/1.25 m ²)	6月中旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
	チャハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.8 頭/1.25 m ²) 発生時期：並～早い	6月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.7 頭/1.25 m ²) 発生時期：並～早い	6月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノホソガ	発生量：やや多 (巻葉数 1.2 葉/1.25 m ²) 発生時期：並	6月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：並 (叩き落とし虫数 10.6 頭/4 カ所)	6月中旬発生量：やや少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：多 (叩き落とし虫数 2.7 頭/4 カ所)	6月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	クワシロ カイガラムシ	発生量：やや少 (寄生株率 0.7%) 発生時期：早い	6月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ヨモギエダシャク	発生量：やや多 (叩き落とし虫数 0.1 頭/4 カ所)	6月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：並か少ない (±)

作物名	病虫害名	予報 (7月の県平均平年値)	予報の根拠
きく (施設)	黒斑病・褐斑病	発生量：少 (発病株率：0.4%)	6月下旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：ほぼ平年並(±)
	アザミウマ類	発生量：やや少 (平年7月被害株率：17.1%)	6月下旬発生量：少(+) ただし、一部ほ場で多(+) 気象予報：気温：高い(+)
	アブラムシ類	発生量：並 (平年7月寄生株率：0.1%)	6月下旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+)
	オオタバコガ	発生量：やや少 (平年7月被害株率：2.1%)	6月下旬発生量：少(発生なし)(-) 6月の成虫誘殺数：並～多(±～+) 気象予報：気温：高い(+)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期について記載がある場合は、時期の予想ができる病虫害に限り、平年(静岡県のごく過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は
こちらで検索!



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病虫害防除基準

<https://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【稲】

<生育の概況等>

巡回時の生育は、早期栽培が分けつ期～幼穂形成期、普通期栽培が活着期～分けつ期であった（調査期間：6月9日～20日）。なお、病害虫防除員の情報によると、生育は概ね平年並である。

●葉いもち・穂いもち

予報の根拠

- ・ 6月上～中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.3%）。また置き苗いもちの発生もみられなかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、発生を助長しない（感染好適条件：気温15～25℃、葉面湿潤時間10時間以上、前5日間の平均気温が20～25℃を全て満たす時）。

防除対策

- ・ 置き苗は本田に植え付けた株より早期に葉いもちが発生し、いもち病の伝染源になりやすい。田植え後できるだけ早く補植をすませ、不要な苗は速やかに処分する。
- ・ 育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した曇雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- ・ 梅雨の時期は特に発生しやすい気象条件となるため、上位1～3葉に病斑が見られる場合は適期（穂ばらみ期～穂揃期）に必ず防除を実施する。特に急性型病斑（周辺部に褐色部分がなく、暗緑色あるいはねずみ色の病斑）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・ 常発地では薬剤の予防散布を行う。
- ・ 本県ではMBI-D剤耐性いもち病菌が発生している。また、他県ではQoI剤耐性いもち病菌が発生し問題となっている。本県でも耐性菌の発生が懸念されるため、発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ <https://www.s-boujo.jp/>）」の「参考資料」内「殺菌剤使用ガイドライン（日本植物病理学会 殺菌剤耐性菌研究会）」を参照）。

●縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

予報の根拠

- ・ 6月上～中旬の巡回調査では、縞葉枯病の発生は確認されなかった（平年平均発病株率0.03%）。また、本病を媒介するヒメトビウンカの最高寄生数は0.04頭/株（平年0.27頭/株）と平年より少なかった。
- ・ 6月第3半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、ヒメトビウンカの誘殺数は磐田市加茂で平年より多く、他の3ヶ所で平年並～少なく推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並であるが、気温は平年より高いため、ヒメトビウンカの増殖をやや助長する。このため、本病の発生もやや助長される。

防除対策

- ・ 例年、縞葉枯病が発生する地域ではヒメトビウンカの発生に注意し、特に稲の感受性の高い幼穂形成期頃までを中心に防除を行う。

●セジロウンカ

予報の根拠

- ・ 6 月上～中旬の巡回調査では、セジロウンカの発生は確認されなかった（年平均最高寄生数 0.03 頭／株）。
- ・ 6 月第 3 半旬時点の県内 4 ヶ所の予察灯では、セジロウンカの誘殺数は浜松市西区雄踏町で多く、他の 3 ヶ所で平年並～少なく推移している。
- ・ 1 か月予報では、降水量はほぼ平年並であるが、気温は平年より高いため、梅雨の下層ジェット気流に乗じて飛来した本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ 株元をよく観察し、成幼虫が多寄生する場合やすす病が発生している場合は直ちに薬剤を散布する。

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・ 6 月上～中旬の巡回調査では、トビイロウンカの発生は確認されなかった（平年 6 月時発生なし）。
- ・ 6 月第 3 半旬時点の県内 4 ヶ所の予察灯では、トビイロウンカの誘殺数は平年並～少なく推移している（誘殺なし）。なお、成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページで提供している。
- ・ 1 か月予報では、降水量はほぼ平年並であるが、気温は平年より高いため、梅雨の下層ジェット気流に乗じて飛来した本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ 本種は世代交代を繰り返すことで急激に増殖し、数が増えてからでは効果が高い薬剤を使用しても十分な殺虫効果が得られない場合があるため、予防に重点を置いた防除を実施する。
- ・ 本種に効果の高い育苗箱施用剤を使用していない場合は、梅雨明け後～出穂前及びその 10～14 日後の計 2 回の防除を検討する。また、本種に効果の高い育苗箱施用剤を使用している場合であっても、今後の誘殺数に注意し、可能な限り 1 回目の防除を検討する。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

予報の根拠

- ・ 6 月上～中旬の水田畦畔・雑草地等における斑点米カメムシ類の発生は、平年より少なかった（30 回すくいと平均捕獲数：11.8 頭、平年 17.1 頭）。
- ・ 6 月第 3 半旬時点の県内 4 ヶ所の予察灯では、アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ及びミナミアオカメムシの誘殺数は平年より少なく推移している。ただし、島田市ではアカヒゲホソミドリカスミカメが平年より多かった。
- ・ 1 か月予報では、降水量はほぼ平年並であるが、気温は平年より高いため、斑点米カメムシ類の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・畦畔及び水田周辺の除草は、カメムシ類の密度低下に有効である。除草してない水田は早急を実施する。なお、出穂直前および以降の除草はカメムシ類を水田内に移動させてしまう可能性があるため、出穂の10日前までに除草を終了する。
- ・出穂後は水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。特に出穂期が周辺より早い水田はカメムシ類が集中するため、注意を要する。
- ・穂揃期（成虫侵入期（すべての茎のうち80%の茎で穂が出た状態））とその7～10日後（幼虫ふ化期）の2回薬剤散布を行うと防除効果が高い。粒剤は出穂期に散布する。イネカメムシの発生が目立つ場合は、出穂期（すべての茎のうち50%前後の茎で穂が出た状態）に散布する。

<その他の病害虫>

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

発生状況

- ・6月上～中旬の巡回調査では、スクミリンゴガイの発生面積率は35%（平年38%）と平年並であった。ただし、病害虫防除員12名中6名から、多い又はやや多いとの報告があった。

防除対策

- ・水路壁面や畦波に赤橙色の卵が多数産卵されるため、見つけ次第卵をつぶす。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が存在する可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。

【かんしょ】

<生育の概況等>

生育は平年並で推移している。

●ナカジロシタバ

予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、平均寄生幼虫数0.4頭/m²（平年0.4頭/m²）と平年並だった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生を助長する。

防除対策

- ・幼虫は齢期が進むと食害量が急増するため、例年発生するほ場では観察により早期発見に努める。
- ・7月に発生が増加するので、若齢幼虫が多数見られるようであれば薬剤防除を行う。

●イモキバガ（イモコガ）

予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.8葉/m²（平年0.5葉/m²）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生を助長する。

防除対策

- ・例年、葉の繁茂に伴い巻葉数は増加する。多発する場合は防除を行う。

●エビガラスズメ

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均寄生幼虫数 0.1 頭/m²）。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生を助長する。

防除対策

- ・ 中～老齢幼虫は1頭当たりの食害量が多いため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を行う。

【温州みかん】

＜生育の概況等＞

生育は、数日早い産地が多い。

●黒点病

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均発病度 0.03）。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ アメダスの気象データを用いた予測に基づいた要防除時期は、6月上旬防除の場合、6月下旬頃（ただし一部地域では既に要防除時期に達している場合有り）、6月中旬防除の場合、7月上旬頃、6月下旬防除の場合、7月中旬頃となる。各産地における要防除時期予測の詳細は、静岡県病害虫防除所ホームページを参照する。
- ・ 防除実施日以降の累積降雨量が 250mm、または防除実施日から 25～30 日経過した時点が次の防除実施の目安となる。上記の要防除時期予測を目安に、栽培地域のアメダスの気象データなどを確認し、累積降雨量が増えた場合は防除を早めて実施すること。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、本種の寄生は認められなかった（年平均寄生果率 0.3%）。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ アメダス気象データを用いた予測によると、多くのかんきつ産地では、第3世代成虫の発生ピークは6月25日～7月10日、第4世代成虫の発生ピークは7月15日～7月29日と予想される（産地により発生時期が異なる）。各産地における発生時期予測の詳細は、静岡県病害虫防除所ホームページを参照する。
- ・ 防除適期は各世代の発生ピークである。各地域の発生ピークを参考に防除を行う。
- ・ 本種を対象に炭酸カルシウム微粉末剤を6月上旬に散布した園地では、7月中旬にも同剤を散布することによって、6月から8月にかけて同種に化学殺虫剤を3～4回散布した場合とほぼ同等の防除効果が得られる。なお、梅雨明け以降の散布は、収穫時期に白斑が残りやすくなるため注意する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査における平均寄生葉率は4.5%（平年6.2%）と平年よりやや少なかった。地域別の平均寄生葉率は、東部地域で0%（平年1.8%）、中部地域で3.3%（平年11.5%）、西部地域で10.2%（平年7.1%）で、西部地域での発生が平年よりやや多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長しない。

防除対策

- ・ 7～8月の盛夏期は高温により本種の増殖量は低下し、土着天敵（カブリダニ類など）の活動が活発になることから、ミカンハダニは減少する傾向にある。ただし、本種が多発している園（寄生葉率が30%を超える園）では薬剤防除を行う。

<その他病害虫>

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、発病は認められなかった（平年平均発病度(果実)発生なし）。

防除対策

- ・ ウンシュウミカンは抵抗性を持つが、中晩柑と近接している園では感染する可能性があるため、感染状況を見て防除を行う。
- ・ 病原菌は、旧葉に形成された病斑から降雨の際に雨滴とともに飛散し、新葉が硬化する前に気孔や傷口から感染する。発生が見られる園地では降雨前に予防散布を行う。
- ・ 夏芽でのハモグリガ被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行う。

●ゴマダラカミキリ

防除対策

- ・ 6月中旬頃から卵巣を発達させた成虫が飛来し、地際部の樹皮下に産卵する。卵や孵化幼虫を対象として7月上旬に主幹から株元にかけて薬剤散布し、幼虫の食入を防止する。

【中晩柑】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、平均発病度（果実）0.08（平年0.06）と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 病原菌は、旧葉に形成された病斑から降雨の際に雨滴とともに飛散し、新葉が硬化する前に気孔や傷口から感染する。発生が見られる園地では降雨前に予防散布を行う。
- ・ 夏芽のハモグリガによる被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行う。

【キウイフルーツ】

<生育の概況等>

生育は、平年並～やや早い。

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、発病葉率は16.5%（過去7年の平均発病葉率8.4%）であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 病原菌の生育適温は10℃～20℃であり、罹病樹から漏出した樹液が風雨により飛散することで気孔や傷口から感染する。
- ・ 平均気温が25℃を超えると病勢が停滞する。9月下旬～10月上旬になると平均気温が20℃付近まで低下するため、菌の増殖が再び活発化する。初夏までに発病がみられた樹については秋以降の経過に注意し、再発病がみられた際は収穫後にコサイド3000を散布する。
- ・ 細菌病であることから、樹体内に一度細菌が侵入してしまうと根本的な治療は難しい。予防防除を重点的に行い、発病樹は伐採するなど早期には場から除くこと。
- ・ 管理作業によっても伝染するため、せん定器具はこまめに消毒する。
- ・ キウイフルーツは風に弱く傷害を受けやすいため、防風対策を徹底する。

【果樹全般】

●カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ）

予報の根拠

- ・ 今年1月の越冬量調査において、落葉1㎡あたりのチャバネアオカメムシ越冬虫数は、県平均1.0頭（平年1.2頭）と平年並であった。
- ・ 5月上旬に実施した、かんきつの花における叩き落とし調査では、カメムシ類の寄生は認められなかった（平年1.3頭）。
- ・ 県内6か所に設置しているフェロモントラップにおける6月1日～20日の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが15.2頭/か所（平年97.3頭）、ツヤアオカメムシはすべてのトラップで誘殺は認められず（平年10.7頭）、両種とも平年より少なかった。同様にカメムシ類は、18.2頭/か所（平年112頭/か所）と平年より少なかった。
- ・ 県内4か所の予察灯における6月1日～20日の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが10.5頭/か所（平年64.0頭/か所）、ツヤアオカメムシが6.5頭/か所（平年65.6頭/か所）といずれも平年より少なかった。
- ・ 以上をまとめると、チャバネアオカメムシの越冬量は平年並であったが、叩き落とし調査ではカメムシ類の寄生は認められず、6月のフェロモントラップ及び予察灯への誘殺数はいずれも少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は高いため、本種の発生をやや助長する。
- ・ 1か月予報を加味すると、7月の果樹園への成虫飛来数は平年よりやや少ないと予想される。

防除対策

- ・ほ場での発生状況をよく観察し、発生が見られたら防除を行う。特に、スギ、ヒノキの近くにある果樹園では注意が必要である。
- ・本年のチャバネアオカメムシ越冬量、フェロモントラップ及び予察灯への誘殺数の詳細は、静岡県病害虫防除所ホームページを参照する。

【茶】

<生育の概況等>

6月中旬の巡回調査時では、二番茶摘採前～整枝後と、地域や茶園により異なった。

●炭疽病

予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、平均発病葉数は7.5葉/1.25㎡(平年3.2葉/1.25㎡)と平年より多かった。地域別にみると、特に川根地域13.2葉/1.25㎡(平年3.8葉/1.25㎡)での発生が目立った。
- ・防除員の報告では、12名中5名が発生量「やや多い」と回答した。
- ・感染には新芽生育時に10時間以上の濡れが必要である。1か月予報では、降水量は平年並であるが、気温は平年よりも高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・降雨により孢子が飛散して感染するため、梅雨明けまでは感染機会が多くなる。防除は三番茶萌芽期から開葉期に実施し、例年発生が見られる茶園では萌芽期と2～3葉開葉期の2回防除を行う。なお、2回防除を実施する際には、1回目に予防効果の高い剤を使用し、2回目に治療効果の高い剤を使用する。

●もち病

予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、平均発病葉数は14.6葉/1.25㎡(平年7.0葉/1.25㎡)と平年よりも多かった。地域別にみると静岡市北部地域56.0葉/1.25㎡(平年26.0葉/1.25㎡)での発生が目立った。
- ・防除員の報告では、12名中5名が発生量「多」もしくは「やや多」と回答した。
- ・本病の生育適温は16～20℃で、新芽生育時に降雨が多く、湿潤な日が続くと多発する。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年よりも高いため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・高湿度条件下で孢子が飛散して感染するので、風通しの悪い山間地域茶園等では特に発生しやすい。二番茶期に発生が見られた茶園や山間地の茶園では、三番茶萌芽期から開葉期にかけて防除を行う

●輪斑病

予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、平均発病葉数は2.4葉/1.25㎡(平年1.5葉/1.25㎡)と平年よりやや多かった。
- ・本病の発病には25℃以上の高い気温が好適である。他の病害と異なり、降雨の多少は発生程度に影響しない。1か月予報によると、気温は平年よりも高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・摘採や整枝によってできた傷口が主な発病部位になるため、常発茶園では二番茶摘採後に速やかに防除を行う。なお、摘採直後に防除ができない場合は、整枝時に摘採面より2 cm程度深く刈り、その直後に薬剤散布を行う。

●チャハマキ、チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、チャハマキの平均寄生虫数は0.08頭/1.25㎡（平年0.26頭/1.25㎡）、チャノコカクモンハマキは発生が認められず（平年寄生虫数0.07頭/1.25㎡）、両種とも平年より少なかった。
- ・6月中旬までの県内各地の予察灯やフェロモントラップでの成虫誘殺状況では、誘殺数は平年並～やや多く、発生時期は平年並～早くなっている。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並より高いため、発生を助長する。

防除対策

- ・第1世代成虫の発生は、6月中旬に盛期となっている地域が多く、第2世代幼虫を対象とした防除時期は6月末までになり、第3世代幼虫を対象とした防除時期は7月下旬以降となる可能性がある。地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意して適期防除を行う。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページで提供している。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、平均巻葉数は2.7葉/1.25㎡（平年2.4葉/1.25㎡）と平年並だった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生を助長する。

防除対策

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。例年7月上～中旬に成虫の発生が多くなるが、6月中旬までのフェロモントラップにおける成虫誘殺数は、平年並～やや多くなっている。
- ・地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページで提供している。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は10.4頭/4カ所（平年11.7頭/4カ所）と平年よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生を助長する。

防除対策

- ・例年、三番茶生育期に発生が増加するので、新芽の萌芽から開葉期に防除を実施する。
- ・更新園では、再生芽の生長期間が長いため本種の加害を受けやすい。発生状況に注意し、再生芽の萌芽から生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は6.6頭/4カ所（平成4.8頭/4カ所）と平成より多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平成並だが、気温は平成より高いため、発生を助長する。

防除対策

- ・ 例年、三番茶生育期に発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。
- ・ 更新園では、再生芽の生長期間が長いため本種の加害を受けやすい。発生状況に注意し、再生芽の生育期に防除を実施する。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は4.6%（平成10.9%）と平成より少なかった。
- ・ アメダス平成値の気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第2世代予想ふ化最盛日は、7月15日と予測されており（6月26日時点）、1か月予報では、気温は平成より高いことから、第2世代幼虫のふ化時期は平成より早い（平成7月22日）と予想される。また、降水量はほぼ平成並のため、発生を助長する。

防除対策

- ・ 地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察して、適期防除に努める。なお、県内各地のふ化最盛予想日は静岡県病虫害防除所ホームページで情報提供している。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.14頭/4カ所（平成0.12頭/4カ所）と平成並だった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平成並だが、気温は平成より高いため、発生を助長する。

防除対策

- ・ 7月に入ると成虫の発生が増加する。茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

<その他病害虫>

●新梢枯死症

- ・ 本症状は、主に新芽の包葉や不完全葉の離脱した傷口から発症する。包葉や不完全葉の多くは新芽の萌芽期から2～3葉期に離脱するので、この時期に降雨が多いと発生が多くなる。また逆に、過乾燥も発症を助長する。
- ・ 昨年発生が多かった茶園では、三番茶芽の萌芽期から生育期に2回程度防除する。なお、QoI剤は、耐性菌が発生しやすいので同一薬剤として扱い、連用を避ける。

【きく(施設)】

＜生育の概況等＞

生育は平年並である。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・ 6月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 0.4%）。
- ・ 1か月予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を助長しない（病原菌の生育適温：黒斑病 24～28℃、褐斑病 20～28℃）。

防除対策

- ・ 多湿によって発生が助長されるため、多雨時は特に注意する。本病は潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。土の上に落ちた被害葉が伝染源となるため、被害葉をほ場に放置しない。

●アザミウマ類（クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

予報の根拠

- ・ 6月下旬の巡回調査では、平均被害株率は 11.6%（平年 18.3%）と平年より少なかった。一部で多発ほ場がみられた。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ クロゲハナアザミウマやネギアザミウマは葉を食害する。発生初期に葉裏まで十分に防除を行う。
- ・ 開花期のキクの花は特にミカンキイロアザミウマの被害を受けやすいため、蕾の膜割れ時から発生に注意する。
- ・ 施設開口部に防虫ネット（目合い 0.4mm 以下）を設置し、侵入を抑制する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 6月下旬の巡回調査では、本種の発生は確認されなかった（平年平均寄生株率 2.0%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ アブラムシ類はウイルス病を媒介するため、寄生が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。
- ・ アブラムシ類が蕾に寄生すると内部で増殖して開花中に被害が生じる。秋ギクの被害が多いので、蕾が形成されたら防除を徹底する。
- ・ 施設開口部に防虫ネット（目合い 0.4mm 以下）を設置し、侵入を抑制する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ 6月下旬の巡回調査では、チョウ目害虫による被害は確認されなかった（平年平均被害株率0.6%）。
- ・ 浜松市のキク産地2ヵ所（西区協和町及び伊左地町）におけるフェロモントラップの誘殺数は、協和町で平年並、伊左地町で平年より多く推移している。また、磐田市のフェロモントラップでは平年より多く推移している。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 例年7月以降に発生が増加するため、芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

3. 季節予報

● 1か月予報（東海地方 令和4年6月23日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 6月24日から7月23日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率60%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率70%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率50%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	30	60
1か月	降水量	30	30	40
1か月	日照時間	40	30	30
1週目	気温	10	20	70
2週目	気温	20	30	50
3～4週目	気温	30	30	40

【予報の対象期間】

1か月	:	6月24日（土）～	7月23日（日）
1週目	:	6月24日（土）～	6月30日（金）
2週目	:	7月1日（土）～	7月7日（金）
3～4週目	:	7月8日（土）～	7月21日（金）

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--